

## 人間の尊厳を返せ

500回目を迎えた元「慰安婦」水曜日集会



韓国ソウルの空は、青く澄んでいた。ここは日本大使館前である。

元日本軍強制従軍慰安婦（以下「慰安婦」）六人を乗

せた黒いマイクロバスは、渋滞の激しいソウル市内を抜け、日本大使館に通じる二車線の細い道路にたどり着いた。予想していた通り、黒い装束をした機動隊員三〇人ほどが、二重に交通規制を敷いて、道路をふさいでいる。

「私たちは『水曜日集会』へ参加する当事者のハルモニ（韓国語で「おばあさん」の意）です。だから、通してください」。 「慰安婦」のおばあさんに付き添っていた男性は、毅然と言い切った。だが、道路をふさいでいる機動隊の責任者は、どんなことがあるうとも道をあげようとしないう。 「ここは通さないぞ」。 その一点張りだ。

「水曜日集会」は一九九二年一月八日、「慰安婦」とその支援団体が日本大使館前で、日本政府に対し、公式謝罪・真相究明・被害者補償などを求める抗議集会を開いた

ことから始まった。週一回の集会はその日、二〇〇二年三月十三日の水曜日、五〇〇回目を迎えることになった。約十年間、阪神大震災の直後や公休日の水曜日をのぞいて、雨の日も雪の日も続けられてきた息の長い抗議集会である。

「慰安婦」を支援しながら「水曜日集会」を事実上開催しているのは、三十七の女性・市民・労働・学生・宗教団体を中心にした韓国挺身問題協議会（以下、「挺身協」）である。「挺身協」の主張は以下の通りである。一、真相の究明。二、戦争犯罪を認めること。三、公式謝罪。四、戦犯を処罰すること。五、追悼碑と史料館を建てること。六、被害者に賠償すること。七、歴史教科書に載せること（『日本軍「慰安婦」問題の解決運動の過去と現在、そして未来』より）

本来韓国では、在外大使館の周辺一〇〇㉟以内の集会やデモは禁止されている。だが、この「水曜日集会」だけは例外的に黙認されている。それだけ、この「慰安婦」の問題が、韓日関係において、微妙な問題であることを証明している。

道路をふさがれたマイクロバスは仕方なく、迂回路を巡り、裏通りを抜け、日本大使館前へ通じる道を目指した。やはり、その先でも、屈強たる機動隊員約二〇〇人が、三重に道路を遮断していた。ここを通してもらえないとなると、今日の集会は中止になるかもしてない。

突然、車の周りが機動隊員に囲まれてしまった。私は、物々しい雰囲気車が車外を覆っているのを感じた。車の最後部に座っていた私は、「慰安婦」のおばあさんたちの様子をうかがった。しかし、おば

あさんたちは、なんら動揺することなく、事態の推移を見守っているだけだった。正直、彼女たちの静かな態度におそれいった。なんとか警備の責任者と話がついた。

五〇〇回目の記念集会だから、確実に「慰安婦」のおばあさんが大使館前に現れるだろうと、約五〇人近い報道陣が彼女たちを待ちかまえていた。

「もう、お祭りだね。こんな時だけは」。おばあさんの一人が私にそう言った。確かにそうだ。先週の水曜日はしぐれ空で、手はかじかむほどの寒さだった。白い息を吐き続けながら前の週は、すなわち、四九九回目の「水曜日集会」は、さみしく行われた。しかしその時、集会を取材する報道陣は誰一人として姿を表さなかった。

日本政府は、「慰安婦」たちの主張や存在を、過去の「遺

物」として、無視の態度を決め込んでいる。さらに韓国国内でも、「慰安婦」は「過去の問題」として扱われようとしている。「慰安婦」を民族の恥だと言ったり、「慰安婦」のハルモニは、「挺隊協」によつて、「水曜集会」に強制的に「参加させ」られている、また、金目当ての集会じゃないのか。資料の中には、そんな記述もある。しかしそのどれも、「慰安婦」のおばあさんから直接話を聞かずに、推測だけで書かれているのだ。果たして、どういう思いでおばあさんたちは、「水曜日集会」に参加しているのだろうか。本当のところはどうなのか。それを知りたくなつた。ツテを頼つて、「慰安婦」のおばあさんの共同生活所・「ナムの家」に一週間住み込んで、直接話を聞く手筈を整えてもらうことができた。



「ナムの家」とは韓国語で、「分かち合いの家」を意味する。自らが慰安婦として名乗り出て行き場を失つた、あるいは家族と生活を共にしづらくなつた「慰安婦」たちが共同の生活を続けている場所を指す。

二〇〇二年三月までに「慰安婦」であると二〇三名が名乗り出てきた。そのうち六一

名は、すでにこの世にはいない。また、「ナムの家」には現在、九名の元「慰安婦」のおばあさんが共同生活を続けている。

四九九回目の「水曜日集会」が終わつた三月六日、その足でソウルの南、京畿洞・広州市にある「ナムの家」に入った。

私は、日本の国籍を持ち、三〇代後半の男で、一八〇cm近い背丈がある。また、おばあさんたちの世話をするボランティアでもなく、取材が目的の訪問である。そんな私が、おばあさんたちに受け入れてもらえるかどうか、不安がないといえは嘘になる。

「韓国の新聞社の人（男性）も取材のため一週間泊まり込んだことがありますよ。言葉に不自由しない彼でさえ苦労したと聞いています。でも、日本語を話すおばあさんも何人かいますし、心配ありません

んよ。ハルモニたちとできるだけ時間を共にするようにするしかないですね。ただ、個性あるおばあさんたちばかりで手こずると思いますよが」。

「ナヌムの家」の院長である尼僧・能光（ヌン・グアン）さんはそう勇気づけてくれた。

「ナヌムの家」生活館1号棟の一階は、団らん室になっている。そこで、テレビに見入っていたおばあさん三人と初顔合わせをした。あらかじめ目を通していた資料を思い浮かべ、おばあさんの名前と顔写真を思い出そうとする。が、緊張感からか、冷静な頭で、顔と名前は一致させることはできない。

「アンニヨンハセヨ（こんにちは）」挨拶の言葉は出てきたが、声がうわずっているのが、自分でも分かる。「こんにちは」

日本語で返事が返ってきた。

その一言はでほつとした。身体力が抜けた。

団らん室横の部屋から、糸巻きをしているおばあさんが出てきた。あ、朴頭理（パク・トウリ）おばあさんだ。この人の顔は、すぐに分かった。パクさんは、テレビを見ているおばあさんと一緒に、糸をほぐし始めた。その様子を一〇分ほど見つめる。

私の気分も、ようやく落ち着いていた。パク・トウリさんの相手をしているのは、李容女（イ・ヨンニョ）さんだ。二人の様子を写真に撮りはじめる。パクさんは、「アハハ」と歯の一本もない口を大きく開け、笑い顔となる。イさんは、別段、写真を撮られるのを嫌がる様子は見せなかった。しかし、イさんが口を開いた。

「あなた、何しに来たの？  
また、話を聞きに来たの？  
遅すぎるよ。この一〇年、

いろんな人が来て、毎日毎日、ずっと話をしてきたよ。もう嫌になるくらいね。苦労話ばかりさせられてきたよ。六〇年前に来てくれたら良かったのに、遅すぎるよ」

私は、何も言えなくなった。何も聞けなくなってしまう。



テレビがコマーシャルになる。イ・ヨンニョおばあさんは、部屋の入り口の扉を一〇〇ほど開け、タバコを吸い始めた。イさんは、酒好きだと聞いていた。

「おばあさん、お酒好きだったね。まだたくさん飲んでるの？タバコは身体に悪いですよ」

私は、おばあさんの身体をいたわるつもりで、声をかけた。

「酒もタバコもやらなければ耐えることができない、そんな生活だったのよ。何も知らない一六歳の私に、酒・タバコを教えてくれたのは日本のヘイタイさんなのよ」

私は再び、何も言えなくなってしまう。

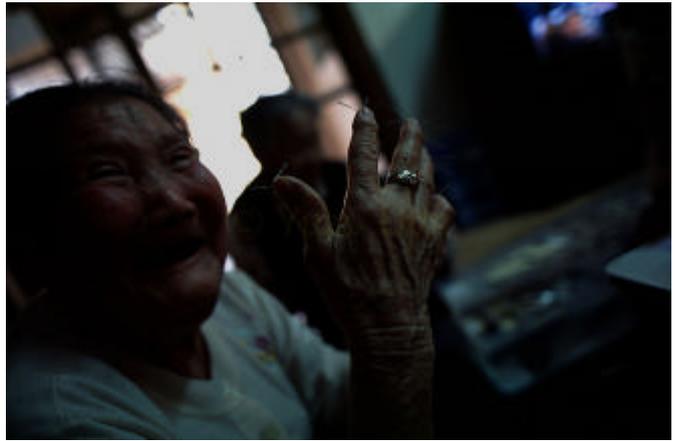
午後五時半、夕食が始まった。一〇人（イ・ヨンニョさんはソウルで独り住まいしているが、今回は、数日間友人を訪ねていた）の元「慰安婦」

のおばあさんが勢揃いした。

テンプルについた私は、何をどう話を切りだしていいのかわからなかった。韓国語の不自由さだけが原因ではないのは分かっていった。ただ、黙って、ご飯を口に運ぶだけ。三度の食事を作る賄婦さん、さらに尼僧二人を含め、テンプルについているのは全員が女性である。妙な闖入者がその場の雰囲気を書き乱しているのははっきりしていた。

「ちゃんと食べましたか？お代わりは？もつとご飯たべなさいよ」

私の左横に座っていた金順徳（キム＝スンドク）さんは、ぎこちない私を気遣ってくれ。食事が終わった後でも、「コーヒー飲みますか」と声をかけてくれた。



翌朝、柔らかな太陽が昇ってきた。前日のしぐれ空が嘘のようだ。暖かい日差しは、静かな山間に建つ「ナヌムの家」を照らし始めた。朴玉蓮（パク＝オンリョン）さんが一人、生活館前の張り出しの前に座っている。朝食後の一服を楽しんでいた。私は何も話しかけることはできない。でも、なんとか一緒に時を過

ごしたい。そう思うだけだった。黙って横に座ることにした。それだけで満足だった。一〇分ほど、沈黙の時が流れた。

「アベ中尉はもう戻ってこないよ。死んでしまったんだね。私はシズコと呼ばれてたんだ」

何も尋ねていないのに、パク＝オンリョンさんは、ささやくように話し始めた。さらにゆっくりと自分の身の上話を続けていく。

「結婚しようよ、言ってたよ」

三〇秒ほど沈黙が続く。

「それで、何て答えましたか」

「『はい』、って言いました」

「慰安婦」と銃の力を背後に持った日本兵との愛情関係をロマンだけで語るべきではないだろう。しかし、一人の女性として男性に思いを寄せていたという事実もあったのだ。当然のことだが、今も昔も、おばあさんたちは、一人

の女性であるのだ。

パク＝オンリョンさんもまた、自らの意志で「水曜日集会」に参加している。

「もし、日本政府が認めないのなら、二〇〇歳まで生き抜いて謝罪を勝ち取る」。強い決意を柔らかな口調で話す。

「日本に公式謝罪と賠償を求めるのは、過去にあった事実を覆い隠そうとする、『今』のその態度が許せないのです。証拠を出せと言いつけるなら、私たちが、生きている私が証拠ですよ」と訴えたいのです。

「ナヌムの家」に滞在中、一〇人の「慰安婦」のおばあさんのうち、最後の最後まで二人のおばあさんに口をきいてもらえなかった。また、「慰安婦」のおばあさんたちが例外なく、積極的に「水曜日集会」に参加しているわけではない。例外的に否定的な見方をする人が一人いた。「ナヌ

ムの家」の滞在三日月にもなると、ようやく私の存在も自然になってきた。普通に話をしてもらせるようになった。ある時、イヨンニヨさんは愚痴をこぼした。

「一人暮らしは本当は寂しいんだよ。でも、みんなとの共同生活を上手くやっていけないしね」

一週間のほんの短い間だったが、四名のおばあさんとゆつくりと話をすることができた。おばあさんたちが一番強く求めているのは、金銭的な賠償ではなく、その昔、「モノ」として扱われてきた自分たちの人間としての尊厳を回復して欲しいという訴えであった。

